

## 十四 秘書官の役得

豊臣秀吉と私

私は大蔵省在勤十六年半の間に、三度大蔵大臣の秘書官を勤めた。前後四年の秘書官生活であった。思えば、これは珍しいことである。私は元来秘書官には不向な男である。私が秘書官を、しかも三度に亘って勤めるなどということを用意した人はなかつたろう。それが不思議なめぐり合せで、そのようになってしまったのだから、世の中というものは面白い。尤も自分の適する天職に一生涯恵まれるというような幸運な人は稀有なことであろう。たわいもない運命のいたずらで、仕方なしに不似合の職業にありつくのが、人の世の常のように思われる。

私の最初の秘書官修業は、小磯内閣の津島寿一蔵相の下においてであった。津島さんは、もと私の同郷の先輩であり、且つ私を大蔵省に拾い上げて下さった恩人である。昭和十年、私が大学三年の時、偶々高文に合格したので、これから先、官界に投ずべきか、実業界に進むべきかについて、時の大蔵次官（大臣は高橋是清翁だった）津島さんの垂示を仰いだところ、即座に大蔵省に入るよう勧められた。それからというものは、終始薰陶を受けている間柄で、津島さんが入閣する場合に、その秘書官を勤めるということは、考えて見れば何の変哲もない当り前のことであるといえ言えないことはない。それにしても、秘書官に不向な私を起用しようとされたの

だから余程の決心であられたことと思う。第二回目は終戦直後の東久邇内閣における同じく津島蔵相の再度の秘書官であり、第三回目は吉田内閣の池田蔵相のそれである。

池田さんの場合は、津島さんの場合とは若干事情が違う。池田さんは広島県出身であって、同郷の先輩でもない。又同学の先輩では勿論ない。唯、大蔵省における上司であつたに過ぎないのである。ところが池田さんは、私が税務署長の頃から、どうしたものか、私に特別の親愛感をもつていられたように見受けられた。私が大蔵省において、次々とポストを変えて行つたが、その節々に彼のこまやかな配慮があつたようである。そして不思議なことには、私が津島蔵相の秘書官になつたきつかけも、他ならぬ池田さんの配慮であつたということである。

昭和二十四年の五月下旬のことであつた。経済安定本部の公共事業課長であつた私は、偶々南九州地方を旅行していた。その途次私は鹿児島県庁に重成知事を訪ね、岩崎谷別荘で知事と夕食を共にしていた時であつた。宴酣の頃、重成さんから一通の電報を渡されたのである。「キクンヲヒシヨカンニキヨウシタシ、イソギキキヨウセラレタシ、イケダ」というのであつた。全く予想もしなかつたことであつたので（事実もう秘書官でもあるまいと思ひ切つていた）、私は恩義と自負のあいだをあれやこれやと考えさせられて、その夜はまんじりとも出来なかつた。翌朝池田蔵相宛に「ゴオンコシンシヤスルモ、ココロチチニミダレテケツシンツカズ、キキヨウマデゴ

ユウヨヲオネガイス」と返電した。そうしておけば、大蔵省の同僚が何とか心配してお役御免にしてくれるだろうという期待も手伝って、ゆっくりと残りの旅程を歩いたのである。

霧島から都城、宮崎、延岡を経て別府に辿り着き、そこで二日間ゆっくり湯につかって、人目にたたないようにコツソリ帰京した。帰京後、声をかけて下さった御挨拶のつもりで、大臣室に池田蔵相を訪ねた。そこで私は、「私を秘書官にという折角の御所望ですが、大蔵部内にはより適任者が雲のようにおります。私が最適任者を物色して推薦申し上げますから、私の起用だけは御勘弁願いたい」と申出た。笑って聞いていた池田蔵相は、「いや、もう一週間も前にちゃんと君を秘書官に発令してある。わしが大臣をやる以上、君が秘書官をやるのは当り前のことではないか。何もしなくてもよいから、じつと隣りの部屋で坐っていてくれたらそれでよいのだ」という口上であった。私は返す言葉もなく、それから秘書官室の主人となったのである。

秘書官のことを俗に「かばんもち」という。大臣のかばんをもって随行するところから出た言葉であろう。一種の従者である。秀吉が信長についていた頃は、それを「ぞうりとり」と言っていたようである。大臣の側近には、誰かこういう仕事をする別の人がいるわけだが、秘書官はそういう仕事をしよっちゅうしているわけではない。と言つて、大臣のかばんを全然もたないわけでもない。偶々そういう場面に出くわすこともあるのである。それも偶々の話である。更に秘書

官は大臣とよく起居行動を共にしているので用心棒のようにも見える。勿論、大臣が凶変に遭えば、身を以て守り抜く用意がなければなるまい。しかし用心棒の本職は、ちゃんと警視庁から部長級の警官を「護衛」として派遣されている。してみれば秘書官の職能を「かばんもち」であるとか「用心棒」であるというのは、その実体にピッタリしない。そういう役目は、偶然のことであつて常にそうであるわけではない。

秘書官は、又大臣の補佐役であるといわれる。たしかに補佐役であるには違いない。大臣ともなれば、補佐役がなくては勤まるものでは勿論ない。必ず何人かの補佐役がある。大きく言えばその役所の人全部が大臣の補佐役と言えよう。特に次官とか各局長とかは、文字通り補佐の役目をやっている。何も秘書官に限ったことではない。それでは、秘書官の補佐と他の者の補佐とは一体どのように違うのかと言うことだが、そこらあたりに秘書官の本質を摘出する鍵がかくされているように思える。次官とか局長とかいうのは役所の仕組の一つの駒であつて、特定の大臣につきものではない。大臣が誰であつてもよいわけである。彼等の服務の規律は、誰が大臣であるうと、その所管の仕事の範囲について一生懸命に補佐の任に当るのが、彼等の義務であり責任でもある。大臣たる人によつて補佐の濃淡、軽重の差別があつてはならない。彼等と大臣とのつながりは、従つて制度的なつながりに他ならない。尤も人間のことだから、大臣の如何によつて好

悪や親疎のあやは勿論あるにはある。特定の大臣が辞職すればこれに殉じようとする人もないではない。しかし常にそうあるべきであり、そうあらねばならぬという筋合のものではない。又彼等はその所管以外の仕事について大臣に意見を具申したり、その反省を求めたりすることもできないわけのものではない。しかしそれも常道であり常則であるとは言えない。

ところが秘書官の補佐ということになると、別段所管の範囲が限られているわけではない。大臣の仕事の全面を覆う補佐である。時には私事にまで踏み込まなければならぬ場合もある。又どの大臣の秘書官でも勤まるという具合にもいかない。特定の大臣との個人的な人格的なつながり、ということが、大臣と秘書官との関係を支えている支柱であり基盤である。そこで自然両者の関係は運命的なつながりにまで発展してくる。それは大臣又は秘書官が、仮りにわれわれに限りそうではないと主観的にきめこんでいても、客観的にみる世間は、素直にそのように受取つてくれるものではない。大臣の黒星は秘書官の黒星であり、大臣の栄誉や名声は、大なり小なり秘書官のそれになつてしまふ。その逆の場合もそうであるといえないことはない。そのように両者の関係は人格的、運命的なつながりであるから、大臣を辞めてしまえばこの関係が切断されるようなものではなく、それは一生涯のつながりになり、二世三世の縁ともなりかねないのである。「すまじきものは宮仕え」という言葉がある。これは公職にある者の責任の重さを嘆じた言葉である

が、普通の役人さえそうであるとすれば、秘書官のように、生涯の運命を決めてしまうような仕事には、滅多にたずさわるものではないと言えよう。

それにしても秘書官というものは随分役得があるだろうと思われる人がある。確かに役得はある。大きい役得があるものである。先年私は、私淑せる安岡正篤先生と築地の「灘万」で夕食を共にしたことがある。その席上、私は安岡先生に、「貴方は東西古今の歴史に精通されていますが、一体貴方の眼識で、歴史上誰が一番偉い秘書官だったと思われませんか」と尋ねたところ、先生は即座に、「豊臣秀吉です。彼は織田信長の草履取りをしていたが、その間に信長の欠点を知り尽した。そして彼は用心深くその欠点を自ら履まないようにしたからこそ、天下を取ることができたわけです。いわば、秀吉は秘書官の役得を最大限度に享受したと言えましょう」と答えられました。さすがに名言であると言えよう。津島さんにしても池田さんにしても人間であるから相当の欠点をもっておられる。殊に池田さんの場合は欠点だらけといってよい程である。してみると私は相当大きい役得をいただいたものだと思う。役目柄、大勢の有名無名の名士と交りをもつことができ、その人たちの人となりをつぶさに学ぶ機会を与えられると同時に、自分が仕える大臣の長所短所を、目のあたり吟味することができるということは、有難いことである。これを役得と言わずして何を役得と言うことができようか。(昭、二八・八)